

調査研究プロジェクト実績報告書【A 基幹研究】

1. 研究種別：A 基幹研究
2. 研究期間： 2021 年 4 月～ 2024 年 3 月
3. 課題番号：2021A06
4. 研究テーマ名：研究 I-1-A『新しいアイヌの歴史の構築』
研究 I-1-B『先住民族が生活する現代の社会的・政治的・文化的状況に関する研究』
5. 調査研究課題名：近現代アイヌ民族史（誌）と博物館展示をめぐる実証的研究
6. 研究代表者（氏名、職名）：

田村将人	歴史・社会	資料情報室長
------	-------	--------

7. 研究メンバー（氏名、所属機関、職名）：

立石信一	歴史・社会	学芸主査
関口由彦	歴史・社会	研究主査
是澤櫻子	歴史・社会	アソシエイト・フェロー
マーク・ウィンチェスター	歴史・社会	アソシエイト・フェロー

8. 研究協力者（氏名、所属機関、職名）：

山崎幸治	北海道大学 アイヌ・先住民研究センター	教授
内田順子	国立歴史民俗博物館	教授

9. 交付決定額

令和 3 年度： 357,600 円

令和 4 年度： 771,000 円

令和 5 年度： 1,042,678 円

研究成果の概要（200 字）

近現代のアイヌ民族史（誌）の確立に寄与するために、歴史学と文化人類学からアプローチするテーマとして3つの課題を設定した。課題名：①近代のアイヌ民族に関する記録・映像資料の捉え直し（近代）、②現代のアイヌ文化伝承活動と「しごと」に関する聞き取り調査（現代）、③各国の先住民族政策の比較研究を通じたアイヌ民族の同時代状況に関する調査（世界）。

* 調査研究プロジェクトは、国立アイヌ民族博物館の研究職員を対象とした内部競争的資金による研究です。研究成果に関する見解や責任は研究者個人に帰属します。

研究成果の学術的意義・社会的意義（200字）

博覧会、観光地、博物館といった表象の場において、これまで二項対立的な図式（アイヌ／和人）で捉えられてきた人びとの思いや、彼（女）らを取り巻く具体的な社会的背景を実証的に調査・研究した結果、二項対立図式におさまりきらないアイヌと和人の関係性が視野に入ってきた。博覧会に資料を提供したバチラー八重子の聖公会ネットワークや、アイヌと和人の協働によって形成されてきた阿寒湖アイヌコタンが知的財産権の活動にどのように取り組んでいくのかといった課題が浮かび上がってきた。

研究分野・専門分野：

歴史学、文化人類学、民俗学

キーワード：

アイヌ文化、絵葉書、博覧会、インタビュー、観光、知的財産権、先住民族政策

1. 研究開始当初の背景

本研究は、近代以降においてアイヌ民族、あるいはアイヌ文化がいかに表象されてきたのか、そして自ら表象してきたのかを探究し、そうした表象のメディア媒体の歴史的背景や、表象が生み出されてきたコンテクストを明らかにすることを目的としていた。そのうえで、なお現代におけるアイヌ民族の歴史や文化的な事象を明らかにするための有効性に着目し、表象の媒体としての資料ごとの性質に注目してその分析方法を検討した。

① 近代のアイヌ民族に関する記録・映像資料の捉え直し

明治以降、近代化の過程において、アイヌ文化やアイヌ民族、北海道・樺太・千島は、様々なメディア（絵葉書、映像（記録映像、テレビ、映画など）、書籍（小説、紀行文など）、旅行雑誌・観光ポスター・パンフレット等）を通して描かれてきたが、それらはエキゾチシズムやステレオタイプを多分に含むものであった。そうした描かれ方は、いわゆるやらせや強調など注意を要するものであり、従来の研究ではそうした面を批判的に検討することに重きが置かれてきた。また、観光地や博物館でアイヌ文化がどのように描かれてきたかも大きな課題となっている。一方で、被写体となった人物、村落、そして構図や、観光地、博物館におけるアイヌ文化がどのような需要のもとに形成されたのかなどを分析することで、地域研究や社会史的背景の研究に寄与するところが大きいのも事実である。そのようなメディアとしての役割をもつ観光地や博物館の歴史も明らかにされなければならない。そして、アイヌ民族は、外から描かれるだけでなく、言論を通して主体的に自らの置かれている状況や民族意識について描いてきたといえる。したがって、本研究ではこうした歴史性とそこで描かれたことに注目した。

② 現代のアイヌ文化伝承活動と「しごと」の研究

現代においても、アイヌ文化伝承活動や先住民族運動、日々の生活やしごとを通して、様々な民族意識が表現されているといえる。それらの現状が十分に記録されているとは言えず、オーラル・ヒストリーの手法によって丹念に聞き取りを行い、口述の記録を蓄積していくことが、アイヌ民族の現代史を再構成するうえで必要不可欠の課題となっている。ここでは、個人の具体的な活動や生活、しごとに着目して等身大の人物像を描くことによって、現代のアイヌ文化の多様性を考察することにつながっていく。

③各国の先住民族の社会環境の比較研究を通じたアイヌ民族の同時代状況に関する研究

上記①②の課題としての近現代のアイヌ民族を取り巻く状況は、各国の先住民族の状況との比較を抜きに語ることはできない。各国において「先住民族」はどのような政策の対象となってきたのか、どのように位置づけられてきたのか、そして、先住民族自身は自らをどのように位置づけてきたのか、といったことの検討が必要となっている。それらの比較検討を通して、アイヌ民族の同時代状況について考察することが求められている。

2. 研究の目的

* 調査研究プロジェクトは、国立アイヌ民族博物館の研究職員を対象とした内部競争的資金による研究です。研究成果に関する見解や責任は研究者個人に帰属します。

① 近代のアイヌ民族に関する記録・映像資料をもとにした歴史調査

本調査の目的は、書籍、新聞、写真、絵葉書といった紙媒体、映像資料などの各種メディアを歴史史料と位置付け、新たな分析方法を確立することである。方法は、主に歴史学の文献・史料調査の手法に基づき、史資料から当時の人物、村落、アイヌ文化の民族誌的情報等を明らかにする。また、観光地や博物館においてアイヌ文化がどのように描かれてきたかを歴史的に検討する。そして、外側から描かれたアイヌ文化だけではなく、当事者が自身の手で書いた書籍・新聞等を対象とし、当時の言論活動の歴史的研究も行った。

② 現代のアイヌ文化伝承活動と「しごと」に関する聞き取り調査

①の調査が記録化されたアイヌ文化、当事者の声を対象にしていたのに対し、②では記録化されていない現代の個々人の伝承活動や「しごと」を対象とする。その目的は、アイヌの歴史における現在を考えるために、現在のアイヌ文化伝承活動がどのように行われているのか、それが個々人の「しごと」とどう関連しているのかを明らかにすることである。本調査では、阿寒、様似などを中心に、観光地や博物館でアイヌ文化の伝承活動に関わる人々を主な対象として聞き取りを行う。この成果は、「しごと」の職業紹介の〈人物の展示〉の更新につながった。

③ 各国の先住民族の社会環境の比較研究を通したアイヌ民族の同時代状況に関する調査

②の意義は、世界の先住民族との同時代的状況のなかで示される必要がある。③では、国外の先住民族政策の比較研究を通して、日本におけるアイヌ民族の位置づけを示すとともに、それをどのように提示（展示）すべきかについて国内外の博物館展示の手法を学ぶことを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、文献資料、および聞き取り調査による調査研究の手法を主に採用する。文化人類学、民俗学、社会学、歴史学の各分野において、インタビュー（聞き取り）は主要な調査方法として確立してきた（例：ライフヒストリー、ライフストーリー研究等）。また、文献資料を用いることも、伝記では主流であり、インタビューと併用されることも多い。

●文献・アイヌ民具資料調査

- ・当館が所蔵する絵葉書を主として、発行年に関する情報を基に歴史の変遷を整理した
- ・仙台藩白老元陣屋資料館における森竹竹市と野村義一の関係資料調査
- ・板橋区立郷土資料館における石田収蔵の関係資料調査
- ・旭川市博物館における博覧会関係資料調査
- ・幕別町教育委員会（幕別町忠類総合支所）、蝦夷文化考古館における吉田菊太郎関係資料調査
- ・乃村工藝社情報資料室（大阪）における博覧会関係資料調査
- ・立教小学校、だて歴史文化ミュージアムにおけるバチラー八重子関連資料調査

* 調査研究プロジェクトは、国立アイヌ民族博物館の研究職員を対象とした内部競争的資金による研究です。研究成果に関する見解や責任は研究者個人に帰属します。

●インタビュー調査

- ・阿寒湖アイヌコタンにおける聞き取り調査・参与観察
- ・知床ウトロにおける「酋長の家」経営者への聞き取り調査
- ・フィンランドのサーミ博物館(siida)の常設展示調査

4. 研究成果

●文献・アイヌ民具資料調査

アイヌ文化をテーマとした絵葉書は、差別的な構図等に注意しながら、人物、村落等の風景、民具（衣服、器物）などの分析を進めることで、図像の年代、地域等を知れる可能性がある。また、絵葉書の様式の編年（下表）を把握することで、歴史資料としての位置づけも可能となる。

また、乃村工藝社情報資料室（大阪）には、主に故・寺下劫氏が寄贈した博覧会に関するコレクションが所蔵され、ロンドン等で開催された初期の万国博覧会をはじめ、日本各地で開催された大小さまざまな博覧会の報告書、パンフレット、絵はがき、写真等がある。このうち、アイヌ民族が出場したか、またアイヌ資料（工芸品）が出品されたと考えられる博覧会に焦点を絞り、延べ5日間の悉皆調査（資料514点の熟覧と撮影）を行った。アイヌ文化がどのように捉えられ、またアイヌ民族自身が博覧会場においてどのように自文化を表象したかについて、歴史的な変遷を推測するに至った。

立教小学校及びだて歴史文化ミュージアムには、バチラー八重子関連資料が収蔵されている。特に立教小学校に所蔵されているアイヌ民具資料の来歴について言及しているバチラー八重子氏の書簡も残されており、これらを読み解くことによって、いかなる思いで、どのような関係性のもとにバチラー八重子氏自身が博覧会に資料を出品し、また立教小学校に資料を送ったのかが明らかとなった。

●インタビュー調査

現代のアイヌ文化伝承活動やしごとなどに関する口述記録の蓄積を目的に、「酋長の家」を運営する梅澤悦子氏のライフヒストリーの聞き取りを行った。悦子氏のライフヒストリーは戦後の北海道観光ブームと深い関係をもっている。静内、旭川、札幌、奈良、阿寒、知床に移ったきっかけやそこでの出来事等を聞くことにより、観光施設（土産物屋や民宿、博覧会）を舞台にした移動や交流のネットワークについて知見を得ることができた。

戦後の観光ブームの中で、1959（昭和34）年に前田一步園3代園主前田光子が無償提供した土地にアイヌの店舗兼住宅が集り、中央に広場がつくられ、民芸品製作のための共同作業場も設置されて、阿寒湖アイヌコタンが形成された。「ロストカムイ」等の新しい文化伝承取り組みや知的財産権に関する取り組みについて、聞き取りを行った。

先住民族の現代を展示する手法について、当館とフィンランドのサーミ博物館(siida)の常設展示を比較した。その内容について、2023年6月7日、北海道大学観光学高等研究センター主催のフォーラムで報告を行った。互いの館の展示内容について、サーミ職業訓練校と siida の登壇者と意見交換

* 調査研究プロジェクトは、国立アイヌ民族博物館の研究職員を対象とした内部競争的資金による研究です。研究成果に関する見解や責任は研究者個人に帰属します。

をした。

5. 研究成果の発信

●国立アイヌ民族博物館第4回テーマ展示「地域から見たアイヌ文化展 アカント ウン コタン — 阿寒湖畔のアイヌ文化 —」

本展覧会では、阿寒湖畔周辺におけるアイヌ文化に焦点を当て「歴史」「工芸」「芸能」「共に歩む人たち」「ことば」「観光」の6つのテーマに分け展示する。これらのテーマに基づいて、阿寒湖畔に暮らすアイヌ民族やそれに携わる人たちの歴史やアイヌ工芸、芸能について紹介する。また、過去から現在までの伝承活動や新しい取り組みに注目し、阿寒湖畔のアイヌ文化と観光について焦点をあてる。この展示により、阿寒湖畔のアイヌ文化の概要を紹介することで、今後シリーズ化される展覧会にて、各地のアイヌ文化の違いの理解を促進することを目的とする。

なお、本テーマ展示は、アイヌ文化の独自性や多様性を地域単位で紹介していく、当館シリーズ展覧会「地域からみたアイヌ文化展」として位置付ける。

●国立アイヌ民族博物館第6回特別展示「“アウタリオピッタ” アイヌ文学の近代 — バチラー八重子、違星北斗、森竹竹市 —」

知里幸恵の『アイヌ神謡集』（1923年刊）が発行されてから100年が経ち、その序文は、当時のアイヌ民族が置かれた状況を物語っている。その当時、生活の実態を歌として詠んだアイヌ民族が各地にいた。バチラー八重子は『若きウタリに』（1931年刊）を、違星北斗は没後に『コタン 違星北斗遺稿』（1930年刊）がまとめられ、森竹竹市は『若きアイヌの詩集 原始林』（1937年刊）を出版している。バチラーや森竹の日常を写した掛川源一郎の写真とともに、彼らが残したノートや民具等を展示資料として、当時のアイヌ民族による歌や詩などから、社会状況、歴史を知る展示とする。

6. 主な論文発表・成果物等

〔雑誌論文〕

- ・是澤櫻子「ロシア連邦の先住民運動における先住民組織ライポンの活動変遷と特徴」『東北アジア研究』26、2022年（査読あり）
- ・田村将人「先住民族アイヌの歴史と文化を展示する」『博物館研究』59-1、2024年、26-30頁。
- ・立石信一、田村将人、麻田恭一「立教小学校所蔵のアイヌ資料コレクションの成立について —有賀千代吉とバチラー八重子の関係を中心に」『物質文化』104、2024年、55—71頁。（査読あり）

〔学会発表〕

- ・是澤櫻子「先住民族の権利運動におけるライポンの「翻訳者」としての役割」日本ロシア文学会 2021

* 調査研究プロジェクトは、国立アイヌ民族博物館の研究職員を対象とした内部競争的資金による研究です。研究成果に関する見解や責任は研究者個人に帰属します。

年 10 月 31 日（口頭発表・査読あり）

・是澤櫻子「制度は先住民族の権利の実現にどのように貢献するのか？～手紙資料からみるロシア連邦における先住民組織と制度利用の関係に関する試論～」日本シベリア学会 2021 年 12 月 19 日（口頭発表・査読あり）

・Koresawa Sakurako. Anthropological Study on the Relation between Indigenous Organizations and Institutions for the Realization of Indigenous Rights in the Russian Federation. 1st Japan-Finland Seminar on the Arctic and East Asia. 21.Jan.2022(oral presentation).

・立石信一「〈アイヌコタン〉の移転問題と、1965 年のポロトコタンの開業をめぐる政治史研究」日本大学史学会第 4 回例会 2022 年 3 月 5 日（土）、オンライン

・関口由彦「アイヌ民族の『現代』を展示するーミュージアムの脱植民地化、その可能性の中心」国立民族学博物館共同研究「環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究：人類史的視点から」（代表：岸上伸啓）2021 年 12 月 18 日.

・立石信一、「菅原幸助『現代のアイヌー民族移動のロマン』に描かれた白老とアイヌ民族表象をめぐって」成均館大学校文科大学ー日本大学文理学部 第 1 回次世代研究者ワークショップ「人文学の境界を問う 身体・言語・テクノロジー」, 2023 年 1 月 26 日, 日本大学文理学部

・ウィンチェスター・マーク・ジョン、是澤櫻子「ウポポイとメディア」、国立民族学博物館プロジェクト「先住民と情報化する社会の関わり」研究会、2022 年 10 月 23 日、大阪、招待有

・是澤櫻子、「組織の変遷から考える：ロシアの先住民族の現在」、第 4 回 ArCS II 国際政治セミナーオンライン講演会、2022 年 12 月 22 日、札幌、招待有

・Sakurako Koresawa “National Ainu Museum and the permanent exhibition of the Ainu occupations today”「グローバル社会におけるサーミ民族とアイヌ民族文化ー北方圏、観光、教育、国際協力の視点からー」北海道大学観光学高等研究センター 第 18 回オンライン観光創造フォーラム、2023 年 6 月 7 日

・立石信一、1950 年代から 60 年代中頃にかけてアイヌ民族をめぐる同化から共生への転換について、日本大学史学会第 3 会例会、2023 年 12 月 9 日、日本大学文理学部

〔図書〕

・立石信一、国書刊行会、「ポロトの歴史 ポロトコタンからウポポイの開業まで」『ウアイヌコタン アカラーウポポイのことばと歴史』2023 年、22-40 頁

・田村将人、森岡健治、関口由彦、立石信一、小林美紀、八幡巴絵、竹内隼人、是澤櫻子、マーク・ウィンチェスター、永石理恵、内田祐一（編）、国立アイヌ民族博物館、『アウタリオピッタ：アイヌ文学の近代：バチラー八重子、違星北斗、森竹竹市：国立アイヌ民族博物館第 6 回特別展示』、2023 年、22 頁。

・山崎幸治、文学通信「〈インタビュー〉木彫り熊と文化人類学的発見」北海道大学大学院文学院 文化多様性論講座 博物館学研究室・田村実咲（編著）『開講！木彫り熊概論』

* 調査研究プロジェクトは、国立アイヌ民族博物館の研究職員を対象とした内部競争的資金による研究です。研究成果に関する見解や責任は研究者個人に帰属します。

2024 年、164－195 頁

〔寄稿・解説〕

- ・立石信一「開館3年目の応答 ―ウポポイの『現在』を伝えるために」、アートスケープ「キュレーターズノート：」ウェブ記事
- ・田村将人、立石信一、関口由彦、是澤櫻子「事業報告：基本展示室「ネプキ 私たちのしごと」における職業紹介展示について：開館までの経緯」『国立アイヌ民族博物館研究紀要』2号、2024年、61-69頁
- ・山崎幸治「アンカン ル ピリカ (アイヌの美) >コタンコロカムイ」、朝日新聞、2022年5月18日
- ・山崎幸治「アンカン ル ピリカ (アイヌの美) >カムイ・ミンタラ」、朝日新聞、2022年11月9日
- ・山崎幸治「<アンカン ル ピリカ (アイヌの美) >『酋長の家』の花ゴザ」、朝日新聞、2022年11月18日
- ・田村将人「<ウポポイ オルシペ>68 歌人3人の特別展示 差別 見つめなおす機会に」、北海道新聞、2023年7月1日
- ・立石信一「<ウポポイ オルシペ>69 バチラー八重子が残したもの 同胞のため祈り詠む」、北海道新聞、2023年7月20日
- ・マーク・ウィンチェスター、是澤櫻子、八幡巴絵「<ウポポイ オルシペ>71 森竹竹市の想い 直筆の詩 読み取れる変化」、北海道新聞、2023年8月11日
- ・田村将人、山道陽輪「<ウポポイ オルシペ>73 アイヌ文化とサケ 貴重な食料 靴や服にも」、北海道新聞、2023年9月9日
- ・田村将人「アイヌ民族の歴史と文化をどう説明するか」『むすびめ 2000：図書館と日本在住外国人をむすぶ人・ことば・生活・本・情報の通信』125、2024年、12-14頁。

〔その他〕

- ・是澤櫻子、「ロシア連邦の先住民族の現在について―組織の変遷から考える」、Knit-K 主催オンライントークイベント：ポストソ連地域における権威主義と多様性、2022年5月1日、オンライン、招待有
- ・是澤櫻子 ラップランド大学客員研究員 (2023年1月16日―2023年2月15日)

* 調査研究プロジェクトは、国立アイヌ民族博物館の研究職員を対象とした内部競争的資金による研究です。研究成果に関する見解や責任は研究者個人に帰属します。